金鶴泳作品集成　作品社

金鶴泳（きん・かくえい）

一九三八年、群馬県に生まれる。本名・金廣正。東京大学大学院卒（化学系研究科）。一九六六年、「凍える口」にて文藝賞受賞。以後、〈吃音〉〈朝鮮〉〈父親〉の三つのモチーフのもと、困難な位置で独自な作品を描きつづけた。主な作品に、「錆び」「石の道」「冬の光」「土の悲しみ」など。一九八五年一月四日死去。


金鶴泳作品集成

一九八六年一月二〇日　第一刷印刷
一九八六年一月二五日　第一刷発行

定価三八〇〇円

著者　金鶴泳
発行者　大村勇
発行所　株式会社　作品社
東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒102　電話(03)二六二ー九七五三
振替口座（東京）六ー二七一八三

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）


©Chonjya Paku 1986
ISBN4-87893-119-1 C0093

# 金鶴泳作品集成　目次

I

凍える口　9
遊離層　98
錯迷　170

II

あるこーるらんぷ　227
石の道　278
冬の光　316
鑿　350

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

空白の人　380
土の悲しみ　400

Ⅲ

一匹の羊　433
心はあじさいの花　442

解説　苦しみの原質　竹田青嗣　448

年譜　朴静子編　470
資料　476

裝幀　李禹煥

金鶴泳作品集成

# I

1966～1971

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 凍える口

我は口重く、舌重き者なり。
わが主よ、願わくは遣わすべき者を
遣わしたまえ。（モーセ）
――出エジプト記第四章一〇、一三節――

## 一

烈しい北風が冷たく吹きつけていた。その風の中をぼくは顎を突き出し、目を細め、肩をすぼめながら歩いていた。枯れ木ばかりがところどころにだらしのない姿で立っている、寥々として果てしのない荒野だった。暮色が迫って暗灰色に暮れかかり、はるか彼方の山の背だけが空の薄明りの中に黒く暮れ残っていた。ぼくは方角もかまわずに、考えようともせずに、吹きちぎられんばかりに烈風に吹きつけられているコートのポケットに手を突っ込み、抑えながら、ただ歩いていた。

どこへ行こうとしているのか、わからなかった。しかし一方では、どこに行くのか自分ではっきりと知っていた。言葉ではいい表わせぬものとして、それは感じていた。途方もなくながい時間、しかも少しも疲労を感ずることなく、そうやって歩いていると、やがて遠い山の上の空の彼方に、微かに薄赤い一つの点が現われた。他人には気づくはずもないであろうほどに微かで弱いその光源が、ぼくにははっきりと見ることができた。

〈ああ、あれだ〉とぼくは思った。ぼくは元気づいて、その光の点に向かって足を速めた。その光点も、非常な速度でこ

ちらにちかづいてくるようだった。それはみるみるうちに大きくなっていき、大きくなるにつれて光度も増し、やがて太陽と同じほどの大きさ、真赤な朝陽と同じほどの大きさになっていった。それはなおもちかづき、なおも大きくなっていき、途方もなく広がって、しばらくするうちにぼくは巨大な赤い光の球の内側に包まれた。

まばゆい、目のさめるように鮮やかな、赤い天堂だった。風は相変わらず烈しく吹きつけていた。髪が風に吹かれ、後ろになびいていた。しかし、もはや冷たい感覚はなかった。ただ顔だけがほんの少し寒いだけで、身体の他の部分は、自分と、自分が歩いている大地と、それから自分の仰ぎうる空をすっぽり包んでいる、巨大な光球のその熱のために、暖かかった。ぼくは、これだ、と思った。そう思って、安堵した。相変わらず顎を突き出し、目を細めながらも、ぼくの表情は微笑で柔らいだ。ぼくは、自分の顔が真赤な光を満面に照り返しているのを感じた。ながいあいだ探し求めていたものにやっとめぐり逢えたと思った。自分の希求していた場所にやっとたどりついた、自分の憧れていた世界にようやく入ることができた、その歓びにぼくは泣いていた。

〈ああ、これだ〉

充ち足りた気分で、ぼくは何度も呟いた。そして泣きながら、頬を濡らしながら、赤い光の中をなおも、どこまでも歩き続けた。……

そこで、ぼくは目覚めた。

燦々と光り輝いていた陽光も消え、部屋の中は闇だった。夜明けにちかいかと思われたが、外はまだ暗かった。窓のカーテンだけが遠い街灯の光を映し、微かに明るんでいた。

ぼくは、目を大きく開けて、暗い天井を見つめた。布団が重かった。首から下の全身が、重く抑えられ、縛りつけられて、硬直しているような感じであった。ふと、微かな風が顔の上をよぎっていった。

〈風かな〉

ぼくは、目だけを動かして、カーテンを見た。外に風が出たのかも知れなかった。それが窓の隙間から洩れて、吹き込んできているのかも知れなかった。窓は寝床のすぐ斜め上にあり、風が洩れていれば、カーテンをひるがえして、ちょうどぼくの上に吹きかかってくることになる。

しかし、カーテンは微動もせずに垂れ下がっていた。しばらく思案しているうちに、ぼくは、その風が、自分の気息のせいであることに気がついた。顎のところで布団が盛り上がり、突き出ていた。鼻から洩れる気息が、その布団のふくらみにぶつかり、反射して、自分の顔に戻ってくるのだった。

ぼくは、ふたたび目を天井に移し、闇の中を見つめた。そして貼りついているような布団の重みを感じながら、いまの夢について考えた。ぼくは、何年か前にも、同じような夢を見たことを思い出した。

あれも、寒いときだった。磯貝が死んでまもない、大学一年の冬休みのことだった。そのとき、ぼくは郷里の静岡の家に帰っていた。

それは、冬の早朝に、近くの河原に散歩に出かけた夢だった。その夢の中で、ぼくは、ところどころに早起きの農夫の姿が見えるだけの、静かな畑中の道を通って土堤に出、その土堤の上を、もう一つの河との合流点の方に歩いていた。ぼくの郷里の町は、二つの河が合流するところにあり、その二つの河にはさまれているのである。

冬の早朝の空気は冷えきり、澄みきって、一面に薄く、白い霜が降りていた。あたりはしみるように静かな気配に包まれ、ぼくはその静けさの中を、時間と距離を喪失したように、ながいあいだ歩いていた。すると、やがて河の向こうの森の彼方から、真赤な朝陽が昇りはじめた。それがみるみるうちに姿を浮かび上がらせ、まぶしい光線があたりを染めはじめ、しばらくすると、ぼくはその光線束の内側に包まれた。まばゆい太陽の、その光の美しさに見とれ、一種感動しながらなおも歩いていくと、ぼくはある不思議な現象を目にした。煌々と輝く金色の光線が、円錐状にぼくの周囲を縁どり、円錐の頂点の部分を成す太陽の環の中で、小さなある物体が、あるいは、ある人物が、ぼくの方をじっと見つめている気がしたのである。人とも物ともつかぬそのものが、ぼくに語りかけ、ぼくを導き、鼓舞しているようであった。

それが何者であるのか、わからなかった。ぼくを金色の光線で包み、凝視しているもの、それは、いったい、何なのか。ぼくは見定めようとして目を凝らし、そこに焦点を合わせた。しかし、焦点が合うとその得体の知れぬものの姿は消え、焦点が外れるとまた姿を現わす——そんな具合で、ぼくはとうとうその正体を見きわめることができなかった。それは、何か、「神」のようにも思われた。あるいは、磯貝のようにも考えられた。太陽の環の中の、その得体の知れぬものが、そのころ弱っていたぼくを、暖かい、柔らかい光線束で優しく包み、鼓舞しているように思われたのだった。涙がポロポロながれた。ぼくは、泣きながら歩いていった。遂には草の上にうつ伏して、声をあげて泣いた。そうしながら、生きよう、と何度も心の中で叫んだ。……

あのころ、ぼくは神経衰弱に陥っていたと思う。萎えて弱った神経が、そんな夢を見させたのだと思う。それに、磯貝の死もこたえた。わずか三カ月足らずの、短い交友であったが、ぼくのこれまでの人生において、ほんとうに友人といえる友人は、彼一人だった。彼が自殺したとき、ぼくは、他者が死んだというより、自分の中の一部が死んだという気持だった。彼がぼくと同じように吃音者だったためかも知れない。それで、彼の中に自分を見ていたのかも知れない。

〈同じ夢を見た——〉暗い天井を見つめながら、ぼくは思った。〈また神経衰弱だろうか？〉

このところ、また妙な息苦しさに悩まされている。四六時中何かに恐れ怖いている、といったふうだ。絶えず何かに追い立てられ、そしてどこかに追い詰められていく、といったふうな気持だ。「吃音の谷」のせいだろうか？

ちかごろ、またひどく吃るようになっている。声に詰る。自分でも不思議なくらいに、言葉が出ない。そのような時期がある。そして、そのような時期が、周期的にやってくる。吃音など忘れたかのようにすらすらいえる時期があるかと思うと、こんどは極端にひどく吃る時期に見舞われる。「吃音の谷」に陥るのだ。その谷が、ぼくの場合には、およそ四カ月毎にやってくる。なぜそうなってしまうのか、自分にもわからない。原因が知れないのだ。だが、その谷は確実にやってき、厳としてぼくを捉え、ぼくを苦しめ、重い憂鬱の中に閉じこめて放さない。

しかし、このところぼくの神経を弱らせているのは、単にその吃音の谷のせいばかりではあるまい。いよいよ今日に迫った、あの恐怖の時間のせいもあるであろう。すでにかなり以前から、ぼくは今日に控えた恐怖の時間のことをたえず気にかけ、その時間のために、悩まされてきた。その恐怖の感情は、まったく不随意なものだった。意志の力ではどう抑えようもなく、神経の方で勝手に戦慄し、恐怖し、胸を苦しめ、そのために、ぼくはたえず、胸中に不安を抱いていなければならないのだった。

それは、研究会に対する不安であった。研究室の今日の研究会で、ぼくはこの三カ月間の研究報告をすることになっており、不安とは、その報告のための言葉に対する不安のことであり、煎じつめれば、結局、吃音に対する不安であった。

昨夜、ぼくは久しぶりに酒を飲んだ。酒はやめよう——いつもそう思っているのだが、そしてここしばらくのあいだ、酒を飲まずにやってきたのだが、しかし、やはり、酒でも飲まないでは、どうにもやりきれないときというものがある。

昨夜もまたそれだった。研究室の帰りに、ぼくは阿佐ケ谷で途中下車し、駅の南口を出て左に折れたところに並んでいる酒場街の一角の、五十がらみの夫婦の経営するいつもの大衆酒場で飲んだ。はじめてそこに入ってから、すでに二年以上も経っており、そこの夫婦とはすっかり顔なじみになっているのだが、ぼくはまだ彼らと話らしい話をしたことがない。「酒を下さい」「それから湯豆腐と大根おろしね」「酒をもう一本」——掛ける言葉といったらそれくらいのもので、夫婦の方でも、ぼくをそういう客と呑みこんでか、まったく話しかけてこないのだ。

一人でひっそりと、何の気がねもなく飲むことができる——その店のそういうところが、ぼくの気に入っているのだ。だから、ぼくは、飲むときはいつもそこで飲む。客を退屈させまいと思って、要らぬことをやたらに話しかけてくる

店があったが、そんなところは、ぼくにはかえって落ち着けないのだ。つらいから飲みにいく。あるいは、何かがやりきれないから飲みにいく。ぼくが飲みにいくのはきまってそんなときだから、にぎやかに話しかけられては、かえってぼくをやりきれなくするだけなのだ。ぼくは、黙ったまま、一人で飲む。飲むと、胸のひとつところにしこりのように凝り固まっているつらさが、酔いとともに全身に拡散され、薄められていくのを感ずる。その柔らかい、穏やかな感覚を、ぼくは一人静かに嚙みしめ、舐め味わう。それが、堪えがたく沈んだぼくの心を、静かに救い上げ、ほぐしてくれる——。

昨夜、ぼくはいつものその店で飲んだ。飲んだといっても、弱った胃腸には、銚子二本がせいぜいであった。腹に何もなかったせいもあるかも知れない。それだけ飲んだだけで、ぼくはもうすっかり深酔いしてしまった。

寝る前のその酔いも、もう醒めている。ただ、妙な胸のつらさ、あるいは不安といったようなもの、それだけが除かれずに、残っている。いったい、この不安にも似た得体の知れない感情は、どこから来るのだろう？　その不安をいっぱいにこめた闇がぼくの上に重苦しく覆いかぶさり、非常な密度をもってぼくの周りにたちこめ、ぼくを抑えつけ、押し潰そうとしているかのようだ。

昨日、ぼくはいつものように研究室に行った。そして、いつものように実験し、いつものような結果を得た。いや、いつものような、ではない。いつもより、それは好い結果だった。ぼくは、もうかれこれ二年余りのあいだ、ある高分子物質の合成を試みてきたのだが、昨日はその重合反応のために必要な単量体の、二十四回目の合成の最終日だった。一週間前から、原料の再結晶精製、反応、溶媒留去、熱分解、目的物質の真空蒸留、その再蒸留精製——といったいくつもの操作を経て、昨日やっと、純粋な目的物質を最終的に得たのだった。そして、その収率が、前回の三七%を六%も上回る、四三%だったのだ。何も得られなかった最初の実験以来、溶媒を変えたり、触媒を変えたり、あるいは反応温度を変えたりするなど、いろいろと反応条件を工夫改良して、ようやくそこまでたどりついたのだった。

しかし、研究室にいるとき、毎日のようにぼくを襲う得体の知れない息苦しさは、相変わらずだった。それは、目には見えない。また、他人の目には、理由はまったくない。しかし、研究室にいるとき、ぼくはなぜか、息苦しくてならない。

じっさい、それはたまらない息苦しさだ。それに堪えられなくなると、ぼくは屋上に逃れ出る。そして、空を見上げながら、しばらく歩く。自分の心がこんなにつらいにもかかわらず、それでも頭上には相変わらず青空が拡がっており、その青空に白い雲が漂っていることに、いまさらのように気づ

き、その自然の泰然たるさまに、ぼくは思わず感嘆し、安堵するような気持になる。この固いコンクリートの建物の上にも、青い空が覆っているとは、その青い空に、白い雲が浮いているなどとは——と、ぼくは広大な天空の彼方に締めつけられた心を飛び立たせ、その澄んだ空間の中に、狭い胸の中のつらい息苦しさが吸われていくのを感じ、いっときのあいだ、心がなごみ、安らぐのを感ずるのだ。

実験室の中には、一種独特の空気が漂っているように、ぼくには思われる。そんなことを思うのは、あるいはぼくだけかも知れない。乱雑だが、しかしそれなりの秩序をもってならんでいる、さまざまな実験装置や分析装置、また山道を登るバスのエンジンのように気疲れのする唸りを、一日中響かせているドラフトや減圧乾燥器のモーターの音、組立てがまずいためにガラスが触れ合ってたてる、攪拌器の水銀シールの音、さらにまた、いろいろな薬品の臭いが微妙に入り混じって醸す、淡い独特の臭気——それらが、実験室の空気を、鉱物質の、一種名状し難い、独特のものにしている。

それは事実だ。しかし、ぼくを息苦しくするのは、それではない。それらはぼくの精神と無関係であり、化学するぼくの頭脳と関係しているかも知れないが、ぼくの感情とはほとんど無縁のものであり、それゆえに、ぼくの頭脳がそれらを支配することはあっても、それらがぼくの頭脳を、あるいは感情を支配することはない。神経的にも、それらはぼくに何の障碍も及ぼしていない。

それならば、何なのか。ぼくをいいようもなく息苦しくしているものは、いったい何なのか。実験することの、空しさだろうか？

実験することは、ぼくにとって、空しいことである。未知の新しい物質の合成に成功したところで、それがぼくにとって、何だというのだろう？ ぼくの精神にとって、それは何の意味も持たないのだ。ぼくは常にその空しさを感じながら、実験している。毎日——じっさい、それは毎日のことなのだ——実験は自分にとって、いったい何なのか、という疑念に悩まされながら、実験している。「研究は闘争である」といつだったか、新しく入ってきた卒業研究生たちに向かって、教授がいったことがある。それにちがいはない、とぼくも思う。生きること自体が、すでに、自己と、他人と、その他人の形成する社会との闘争である以上、生きていることを証明する一つの活動様式である研究もまた、闘争である。だが、ぼくの場合、その闘争とは、研究あるいは実験することの空しさ、それとの闘争なのである。実験はぼくにとって無意味であり、その無意味さは、あのバケツの水を交互に入れかえる無限の作業の無意味さと、同列なのである。

しかし、この世における行為の中で、無意味でないと傲然と断言できるどんな行為があるだろう。あるとしても、それはただ当人があると思うにすぎず、そして、それは錯覚かも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com